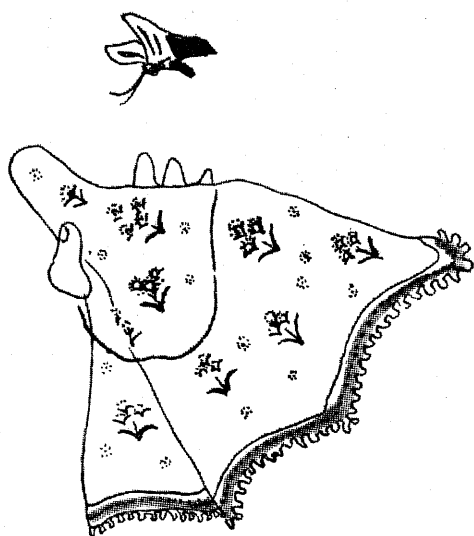


養護学校の日々

写真を見ること——行為の解釈と保育の実践を

めぐって

津 守 真



Hは、棚から写真の袋の束を取ろうとする。「だいじなものだから気を付けて」と云って手を出すと、写真を引き出して床の上に散乱させてしまう。私が気持をかねて、棚から取りおろすのを手伝い、一緒にそれを見ると、Hは熱心に写真をながめている。しばらくすると、写真をもとの棚にもどすことができる。ときによると、Hはネガをとり出し、透かして眺めるが、整理されたネガの順序が狂わないかと私は内心で心配しながら、一緒

に眺めて、元にもどす。ときによって、Hがこわがっている子どもの写真をみつけると、サインペンで顔をぬりつぶしたりする。写真が破損しないかと恐れながらも、この子どもが写真を見ようとする欲望には強烈なものがあって、他に気を散らそうとしても、それはほとんど不可能なほどである。そんなに写真に興味があるならば、大人の生活の秩序が乱されないようにしながら、子どもの興味をみたすようにしようと考えて、私はHと写真とに、何週間もつきあってきた。

だが、子どもがあることに興味をもつというのは、どういうことなのだろうか。それが単に面白いということだけではなくて、その子どもに面白さと呼び起す、更に深い関心の世界があるのではないか。子どもと一緒に生活する中に、いくつもそのヒントは見えているのだけれども、實際生活に巻きこまれ、行為の事實的側面だけに目を奪われて、その行為をしている子どもの世界を見る目を失ってしまう。後になって、自分自身からも、現象からも距離をおいて、反省的思考に上らせるときに、現

象の全貌が見えてくる。それは、しばしば、同じ子どもの保育に参与している他の保育者たちと話し合うことによって促される。自分が手さぐりして考えているときに、類似の現象を、子どもの世界にまでひろげて思索している人の話をきくことが、自分の思考の束縛をこえて想像力をはたかせることを可能にしてくれる。

三学期を終えて、幾人かの子どもをめぐって研究会をしたときに、Hを担当していたもうひとりの保育者が、Hは泣いているときに、鏡の前について自分の顔を見るということ、それは何だろうかと考えているという報告をした。それに対して、他の保育者が次のようなコメントをした。Hは大勢の子どもたちのいる保育室の中では、自分自身を見失うのではないか。Hが恐怖を感じている子どもが何人もいることはそれを示すであろう。すなわち、Hは内的存在感が不確実なので、鏡を見ること、つまり自分を外在化することによって存在を確かめているのではないかと思われるというのである。

* 柏木静子

** 榎沢良彦

写真も、鏡と同様に、自分や他人を印画紙の上に外在化して見せる。Hが恐怖を感じている子どもの写真を見つけると、Hはその顔の上に、更にサインペンで印しをつけて、その存在を確かめる。恐怖をもつというのは、それだけ強い関心をもっていることでもあって、実際、Hはその後、その同じ子どものところに玩具を持っていたり、その顔にえのぐをぬりにいたりした。Hは、その子どもをどのように理解したらよいかわらず、否定的感情と肯定的感情との間を揺れ動き、現実の場におけるHのその子どもについての内的存在感、不確定であったろう。写真という動かない形に外在化されたとき、Hは思うままにそれを眺め、手に持ち、机の後に捨て、あるいは印しをつけて、その存在を確かめることができた。

写真を見ることが、内的存在感の不確かさと関係があるだろうということは、私共の身近な写真体験からも考えられる。私共は、死んだ人とか、むかし別れて会うことの少い同窓の友人など、存在感の不確かな人たちの写

真を喜んで見る傾向がある。場所についても、普段住みなれた自分の家の、内的存在感の確実な場所は減多に写真に撮らず、再び訪れることはないかもしれない場所を写真に残す。

身近な子どもの観察からも、同様のことが云える。子どもは、自分が赤ん坊だった頃の写真を見ることが好きである。親にとっては、子どもが赤ん坊だった時も存在したことは疑うこともない確実さをもっている。しかし、子ども自身にとっては、自分の赤ん坊時代の記憶は不確定である。それはもしかしたら存在しなかったかもしれないと疑う。自分の赤ん坊時代は、親が話してくれたから存在するので、自分自身の記憶としては極めて曖昧なのである。しかし、写真を見るとときに、それは外的に確認され、子どもは安心する。

私自身の体験からも写真とのかかわりの変遷を考えるとすることができる。私は現在、子どもの記録写真を以前ほど撮らない。それには他にも理由があるように思うが、その場で客観的観察による記録を残すよりも、その体験が

過ぎ去ってから、それが新鮮なうちに主観と共に書き残すことに重点をおくようになってから、写真によって記憶に残そうとする気持が減少したことは確かのように思う。体験の主観を含めた記述は、その体験の存在の内的確実さを疑うことができなくしているので、写真という外在化された形をことさらに必要としない。(もちろん、私は写真記録の不必要を云っているのではない。それは別の観点から、必要な場合は多い。)

子どもは、自分の体験を言語でも表現しないし、文字で記録に残さない。それだけに、写真を見るということとは、子どもには、大人とは違った、より大きな意味をもつだろう。

以上に述べた写真についての解釈は、日月積重ねられる保育の中で、その妥当性が確かめられる。

ある日、Hは小学部の大きい子どもたちの箱の製作品を置いた場所にいったとき、牛乳容器を組合わせた製作品を直に取り上げた。それには、色セロファンの板を

押し込めるようになっていて、カメラと名付けて子どもが作ったものであったことが、後になって判明した。また、三学期最終の日に、昼食のあと、小学部の子どもたちアルバムが渡されたとき、Hはたまたまその場にはいたが、Hは最も熱心にアルバムを見ていた子どもひとりであった。写真を見るということは、Hから取り去ることも、止めることもできない、重要な意味をもつものであることが確認される。

このように考えると、Hが写真を棚からおろして見たがるというのは、単に写真に興味があるからというだけでは済まされないことがわかる。それには、自分についても他人についても、Hには、内的存在感が不確実なことがその根底になっていることが推察される。前々月号に、私は、Hが食物を足で踏みにする行動について記した。私は、この行動を、自己実現の体験の欠如に由来すると解釈した。これも自分自身の存在の価値にかかわることである。同じHが、写真にこのようにこだわるの

も、存在感の不確実さに由来すると考えると、Hは、自らの存在の根底について確かさがもてないことで悩んでいると考えられる。可愛らしく見えるHの保育に参与して、このような行為に何度も立ち会っていると、その愛らしさの中に、この子どもの深刻な悩みを感じるのである。そして、この子どもが、そんなに写真を見たがっていたのに、どうしたら早く写真の場面をきり上げるかを考えていた自分自身の洞察の不足を、あらためて認識させられる。Hがこのように熱心に写真を見たがる行為を、肯定し、一緒にその体験に参与し、その活動を拡張し、その行為の意味を深めることができたならば、どんなにかよかったであろう。問題は、子どもの興味と大人の生活の秩序とを、どのように妥協させるかということではなかったのだと思う。子ども自身の存在にかかわる悩みがそこにあったのならば、それにいかにこたえるかが保育の課題であろう。

反省的思考の段階で到達した解釈は、絶対的結論ではない。次の実践に臨むときには、その解釈は再び保留し

て、新鮮な眼で新たな一日に向うのが保育である。そこで子どもを信頼し、子どもと親しんで、共に時を過す中から、子どもの新たな行為が生れる。その行為の意味を見出すことができたときには、保育者は子どもにも自分にも肯定的に向うことができる。反復される行為には、過去の体験に由来する悩みが表現されるのみでなく、それを解決してゆく可能性もまた含まれているにちがいない。意味を見出すということは、未来への可能性に目を開かれることである。三学期の終りに、わずかの時だったが、Hと一緒に写真を見たときのその熱心さは、未来への糧となっていた時であったと思う。

(愛育養護学校)